

# 魚住泊の位置と年代

## 明石市江井ヶ島港出土木材の再検討

Place and Dates of *Uozumi-no-Tomari*  
: Reconsideration of the Buried Woods  
Excavated from the Eigashima Port, Akashi City

春成秀爾・工藤雄一郎・稲原昭嘉

HARUNARI Hideji, KUDO Yuichiro and INAHARA Akitaka

はじめに

① 江井ヶ島における木材の発見

②  $^{14}\text{C}$ 年代測定試料と分析方法

③  $^{14}\text{C}$ 年代測定結果

④ 魚住泊の位置と修築

おわりに

### [論文要旨]

魚住泊は、天平年間に僧行基が播磨・摂津国に置いた五泊の一つである。その場所については、現魚住港説、江井ヶ島港説があるが、確かな証拠に乏しかった。このたび、1986年に江井ヶ島港に接する赤根川の河口から見つかった木椽の一部とみられるマツ材の $^{14}\text{C}$ 年代を測定した。較正年代から伐採年代は10世紀と推定された。この年代は、914年(延喜14年)に三善清行が朝廷に魚住泊の修復を願い出た年代に対応する。魚住泊は、赤根川の河口に木材で基礎を造り石と土を用いて突堤を築き、船溜りをつくったのが起源で、そこが現在の江井ヶ島港に継承されているのであろう。  
【キーワード】 魚住泊, 江井ヶ島, 赤根川河口出土木材,  $^{14}\text{C}$ 年代測定, ウィグルマッチング

## はじめに

魚住泊は、天平年間に僧行基が播磨・摂津国に置いた五泊の一つである(図1)。その位置については、瀬戸川河口つまり兵庫県明石市魚住町に所在する魚住港説と、赤根川河口つまり同大久保町に所在する江井ヶ島港説があった(図2)。しかし、大久保町江井島の赤根川河口には延命寺、長楽寺、定善寺など行基開基の伝承をもつ寺院が存在していることなどから、赤根川河口に求める説が有力であった。

1979年と1986年に、兵庫県明石市大久保町の赤根川河口の浚渫工事の際に海底から引き揚げられた巨大な木材は、魚住泊の位置と年代を確定するうえで極めて重要な資料であるが、その多くがすでに廃棄され、今日まで残っている木材は明石市立文化博物館と同志社大学歴史資料館において保管されている2点の木材のみである。今回、その木材の<sup>14</sup>C年代測定を実施することができた。本論は、その結果について報告し、また、魚住泊の位置と年代について考察を試みたものである。なお、本論の1を春成・稲原が、2・3を工藤が執筆し、4を稲原・春成・工藤がまとめた。

### ①……………江井ヶ島における木材の発見

明石西郊の海岸に位置する魚住泊は、奈良時代以来、播磨の重要な船泊であった。魚住泊の位置は、魚住<sup>(1)</sup>という地名がついているので、明石市魚住町の魚住漁港のある付近だろうと考えがちであ

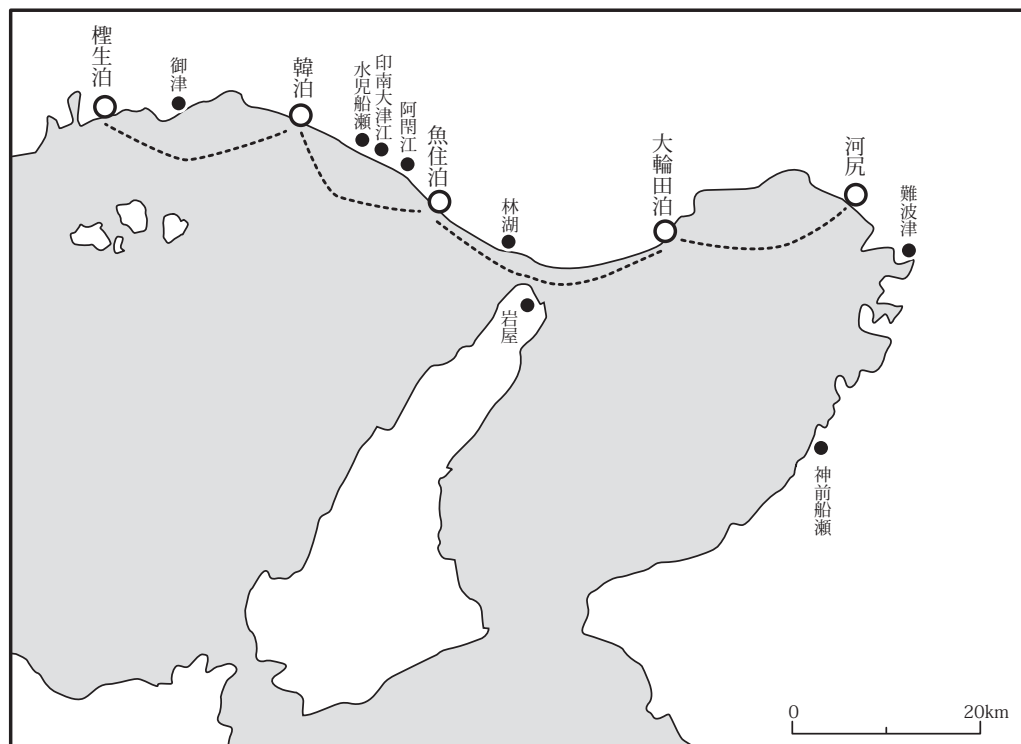


図1 行基が建設した摂播の五泊

る。魚住の地名は、『万葉集』に「名寸隅の船瀬」とでてくるのが初見であるが、これは「魚隅」の誤記とみてよい。『天平三年七月五日付住吉大社司解』すなわち『住吉大社神代記』[黒田編1985:23~24]は元慶年間(877~885年)以後、おそらく平安時代前期頃の偽作とされているけれども、「明石郡魚次浜」の範囲は、東限を大久保尻、南限を海の棹及ぶ際、西限を歌見江尻、北限を大路としている。大久保尻は谷八木川付近、歌見江尻は西二見になる。古代には、魚住を「名隅」「魚次」と呼んでいた。おそらく「魚掬き」つまり魚を掬うの意味であろう。かつての魚住の範囲は広いので、現在の魚住の地名にとらわれて魚住泊の位置を考えることは適切でない。

魚住泊の位置を明石市大久保町江井島(図3)に求めようとする説は早くからあった。かつて『明石市史』をまとめた黒田義隆は、江井ヶ島にある長楽寺の寺伝によると、行基が魚住の泊を開くために祈ったのを天平16年(744年)6月初めとしているが、これより先、聖武天皇が邑美頓宮に行幸した神亀3年(726年)には、すでにできていたと考えられる。おそらく行基は、それまでにあった多くの港湾のうちから選定し、改修したものであろう。大久保町東島と西島のあいだを海へ入る赤根川の河口は、いま江井ヶ島港になっているが、そこが魚住泊の跡とされている。江井ヶ島港には、いまでも「しょうにんさんのはと」(上人さんの波止)があるのは、行基のあと重源上人・性海上人などの僧が修理しているので、彼らが築いた波止という意味であろう、と述べている[黒田1960:60]。つまり、魚住泊は現在の江井ヶ島港の場所で、その歴史は8世紀の初め頃までさかのぼる、という考えである。

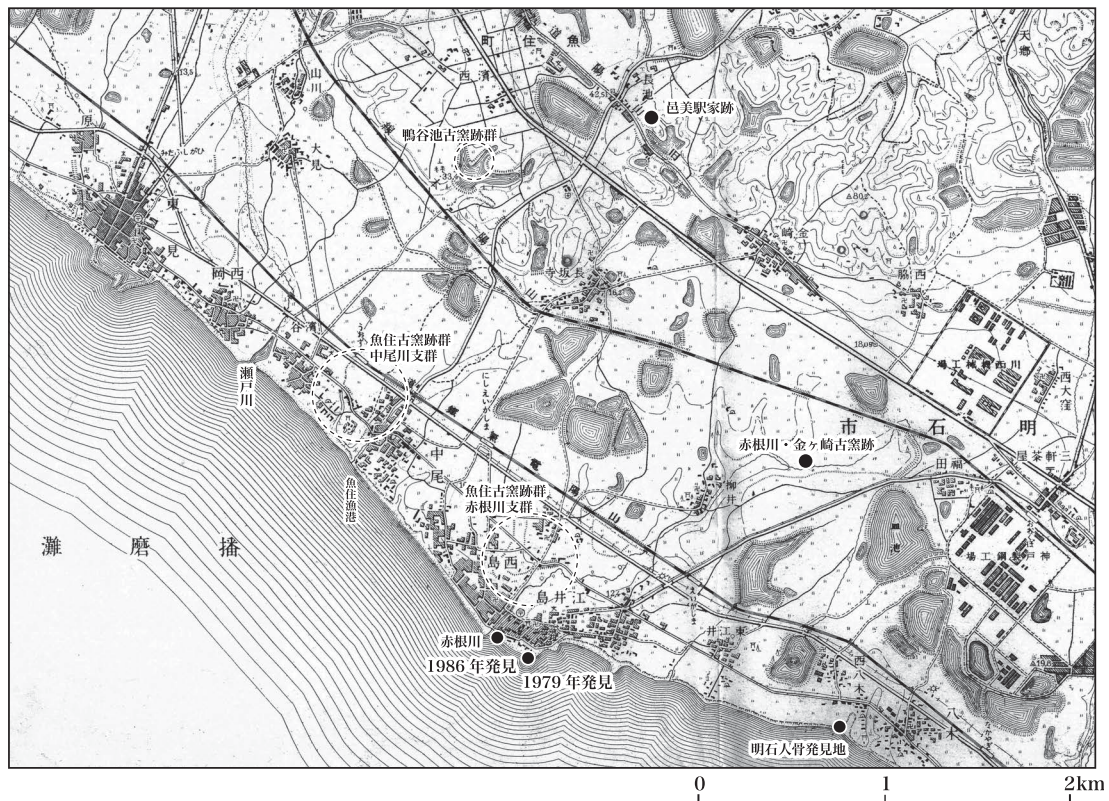


図2 江井島の位置  
(1/25,000 地形図「東二見」1955年発行)



図3 江井ヶ島港 (1964年)

1979年、江井ヶ島漁業協同組合事務所の南で地方港湾改修事業に伴う江井ヶ島港護岸工事（浚渫工事）のさいに丸太材の巨木が多数引き揚げられた。しかし、当時はその重要性が十分に認識されなかったために、精査されず、木材もほとんど廃棄されてしまった。それでも現場で見聞きした黒田や山下俊郎がその状況を書き残してくれたので、その内容はある程度わかっている[黒田1989, 山下1989]。丸太は、径0.7～1m、長さ5～6mの大きなマツ材で、両端に繰り抜きの孔をあけてコ字形に抉ってあり、その間隔は3.5～3.7mあった。これらの丸太は井桁状に組み、その上に人頭大の石が多数置かれていた。そこで、これらの丸太は海または河口の護岸工事の基礎として使ったものと推定された。

1986年7月、同様の木材が赤根川河口の東岸を浚渫工事中に海中から引き揚げられた（写真1・2・3）。木材は計13本、両端に運搬用の繰り抜きの孔をあけてあった。工事関係者によると、菱形に組んだ形で揚げられたというので、黒田義隆は、巨木をもとは井桁状に組み、それを海底に沈め、中に石を詰め、それを幾段にも重ねたものをずらっとつないだ石椋（いしぐら）であったと推定した[黒田1991]。図4は1986年の発見現場を見た稲原による復原図である。木組みが見つかった2地点間の距離は250mを測る。

これが、江戸時代の文化2年（1805年）に描かれた「明石藩領西浦辺組浜辺筋絵図」（写真4）に描かれている赤根川河口の東にある東西200m、南北30mの細長い突堤状の島と関連をもっていることは明らかであった。江井ヶ島とは岸と並行に直線状に築いた石椋の突堤のことをさしており、これによって護られた船溜りが魚住泊の始まりだった、と黒田は考えた。

その後、2012年9月、材が出土した地点のすぐ東隣の現在は埋め立てて公園となっている地点で、材の存否ならびに旧地形の確認を目的として、明石市教育委員会が調査を実施した。1957年作成の

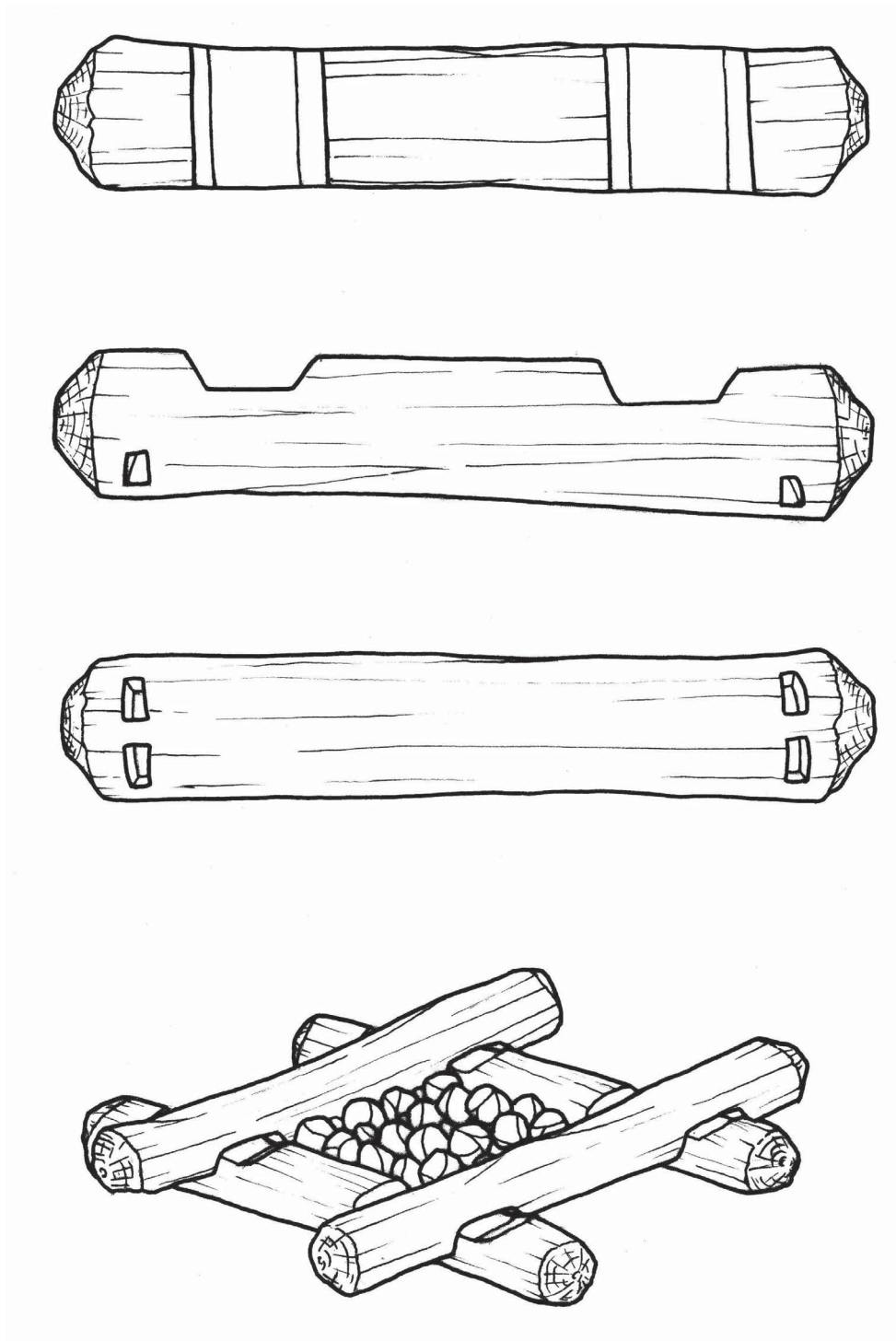


図4 海中から引き揚げられた丸太材の復元工法 (稲原作成)

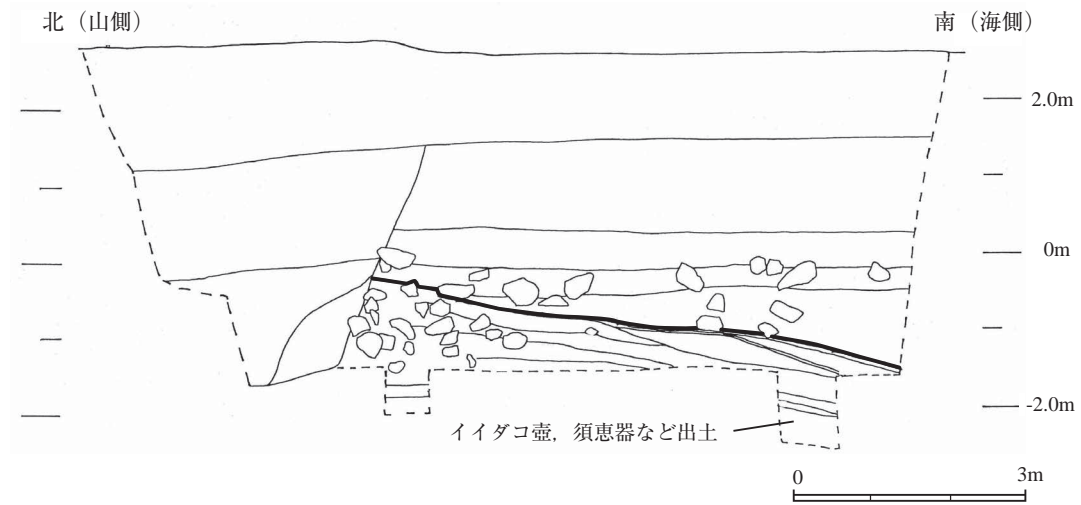


図5 2012年の発掘トレンチにおける遺物出土層位

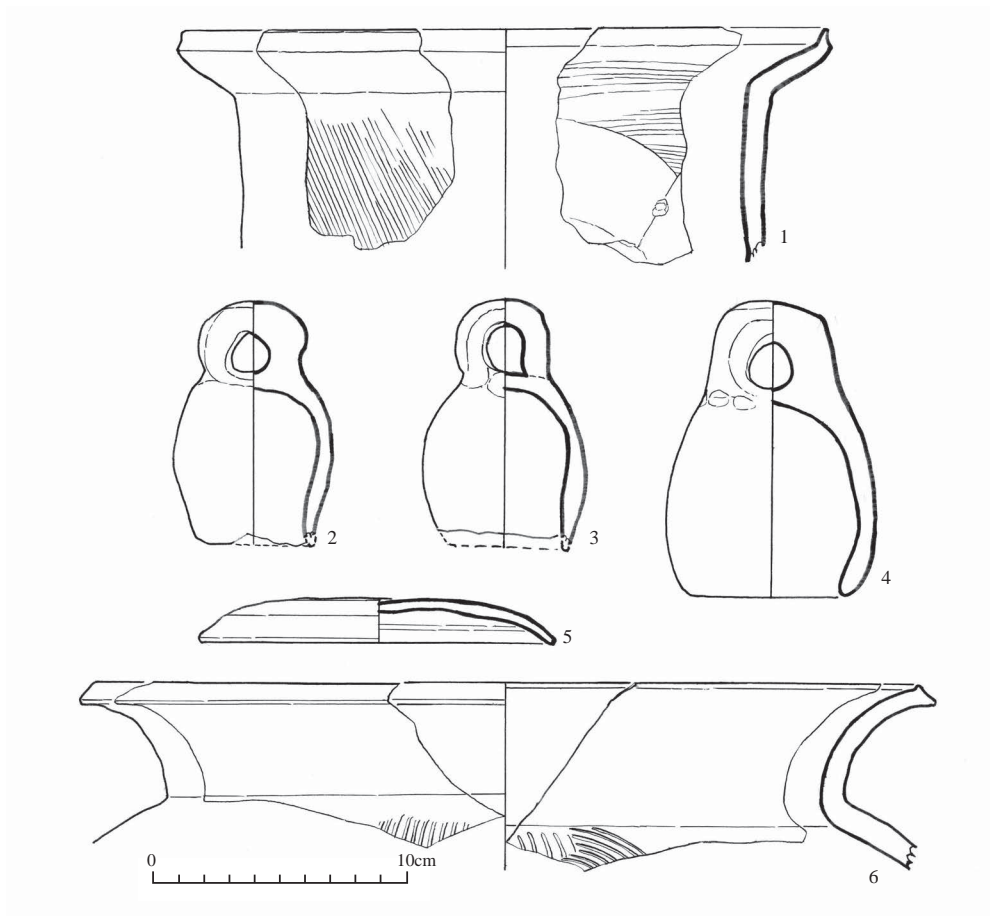


図6 赤根川河口出土品  
(1 土師器, 2~4 イイダコ壺, 5・6 須恵器)

地形図によると、当該地は海岸となっており、その海岸線に直行する形で試掘坑を設定した。

現地表から約3～4mまでは埋め立て時の盛土であり、現代のコンクリート片等の瓦礫を多く含んでいた。その下部に砂層が厚く堆積しており、かつて海岸線を形成していた時期の堆積であると推定された。旧地形は試掘坑の北側に向かって、高くなっていた。

試掘坑の北端付近では30～50cm大の石が約1mの厚さをもち、積み重なった状況を確認できた。旧海岸線に相当し、推定される港の東西の波堤の南端のラインに位置することから、港をつくる際の基礎として積んだものようであることが分かった。

試掘坑の北端から約9m南の箇所では、盛土の下部に約1.3mの堆積層を認め（図5）、その下層からは須恵器の甕口縁部や杯蓋、土師器の甕口縁部など平安時代に位置する遺物があり磨滅を受けない状態で出土した（図6）。

この調査では木材が見つからなかったが、調査区の北端で石が集中して見つかったことや、平安時代の遺物が下層付近から出土したことなどから、平安時代に何らかの工事が行われたことを裏付けるものとなった。

赤根川河口出土の木材は、魚住泊の位置と構築時期を検討する上で極めて重要な資料であることはこれまでの研究から明らかであった。しかし、現在残されているのはわずか2点の木材のみである。これらの資料の<sup>14</sup>C年代測定を実施することで、赤根川の河口から発見された木組みの木材に関する年代的な情報を得ることは、重要な課題となった。

## ②……………<sup>14</sup>C年代測定試料と分析方法

### (1) 分析試料

明石市立文化博物館には、明石市大久保町江井島の赤根川河口から出土した木材が保管されている。この木材は1986年の赤根川河口の浚渫工事において複数本が海中から引き揚げられた長さ5～6m程度の丸太材の一部である。現在、明石市立文化博物館では長さ1m弱に輪切りした状態で2点保管しており、そのうち、井桁状の加工が残る1点の木材から試料を採取し、<sup>14</sup>C年代測定の試料とした（図7）。

この木材は年輪が約105年確認できた。この輪切りの木材の中央から10年輪目付近（AK-01、おおよそ10～12年輪目に相当）、50年目輪目付近（AK-02、47～51年輪目に相当）、100年輪目付近（AK-03、おおよそ101～105年輪目、最外部）の3つの試料を採取した（図8、図9）。なお、最外部に樹皮は確認できていない。どの程度の年輪が失われているのかは不明だが、最外部が示す年代よりも伐採年は新しいことが予想される。

### (2) 分析方法

試料は国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室に持ち帰り、実体顕微鏡下で可能な限り混入物を除去した。その後採取した試料から、<sup>14</sup>C年代測定分析に必要な量の試料を切り出した。

試料を遠沈管に入れ、蒸留水で超音波洗浄を行い、試料に付着した土壌やホコリなどを除去し

た。次に、埋蔵中に生成・混入したフミン酸や炭酸塩などを溶解・除去するため、酸-アルカリ-酸(AAA)処理を行った。アルカリ処理は、試料の状態に応じて0.01～1.2M水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液により、室温～80℃の処理を行った[吉田2004]。徐々にNaOHの濃度を濃くして、水溶液が着色しなくなるまでこの操作を繰り返し、最終的に80℃、1.2Mの濃度まで処理を行った。

乾燥したAAA済の試料のCO<sub>2</sub>化からグラファイト化、加速器質量分析計(AMS)による<sup>14</sup>C濃度の測定までは(株)地球科学研究所を通じてベータ・アナリティック社に委託した。機関番号はBetaである。

また、AK-02の試料の一部を切り分け、(株)パレオ・ラボに依頼して樹種同定を行った。樹種同定は、剃刀を用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)の切片を採取し、ガムクロラルで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。



図7 赤根川出土丸太材2点の保管状況  
今回の試料は写真奥の木材

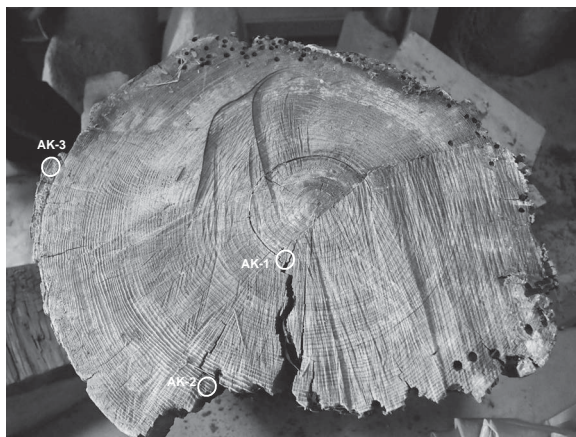


図8 年代測定試料の採取位置

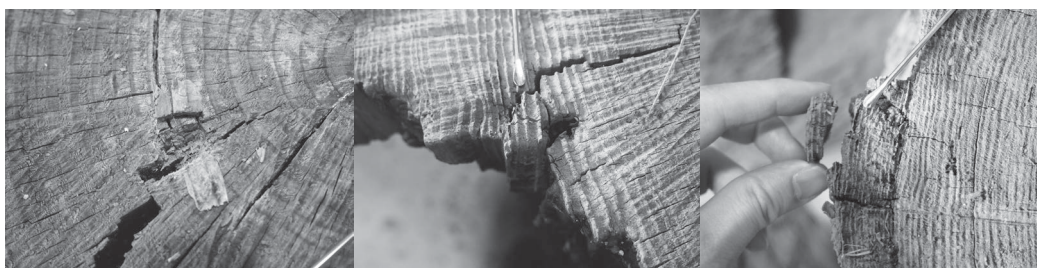


図9 <sup>14</sup>C年代測定試料採取時の様子  
左からAK-1, AK-2, AK-3



### ③……………<sup>14</sup>C年代測定結果

#### (1) 樹種同定の結果

今回測定した木材は、樹種同定の結果、針葉樹のマツ属複維管束亜属であった。以下に、同定の根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* (マツ科 図10 1a-1c)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、韌性がある。

なお、1984年7月の赤根川河口の浚渫工事で引き揚げられた際に、材木商が木の種類を日向松と指摘したとの記載がある[山下1989]。これらの樹種はアカマツであったと考えて問題ないだろう。

#### (2) <sup>14</sup>C年代測定の結果

<sup>14</sup>C年代測定結果は、AK-01が $1170 \pm 30$  <sup>14</sup>C BP、AK-02が $1230 \pm 30$  <sup>14</sup>C BP、AK-03が $1140 \pm 30$  <sup>14</sup>C BPを示した。得られた<sup>14</sup>C年代は、OxCal4.2[Ramsey, 2009]を用いてIntCal09[Reimer et al., 2009]の較正曲線を使用して較正した。表1には較正年代の確率分布の $2\sigma$ の範囲を示した。その結果、AK-01が770～970 cal AD、AK-02が680～890 cal AD、AK-03が780～990 cal ADとなった(表1, 図11)。これはおおよそ8～10世紀の年代に相当する。なお、これらと較正曲線の関係を示したものが図12である。

AK-01、AK-02、AK-03の3点の測定結果と年輪に基づく3点の試料の年代的関係を用いて、ベイズ統計を用いたウィグルマッチング法によってより高精度な年代決定を試みた。プログラムはOxCal4.2のD\_Sequenceを用いた。結果を図13・図14に示す。

ウィグルマッチングの結果、最外部のAK-03の年代が、 $2\sigma$ の範囲で860～940 cal AD、 $1\sigma$ の

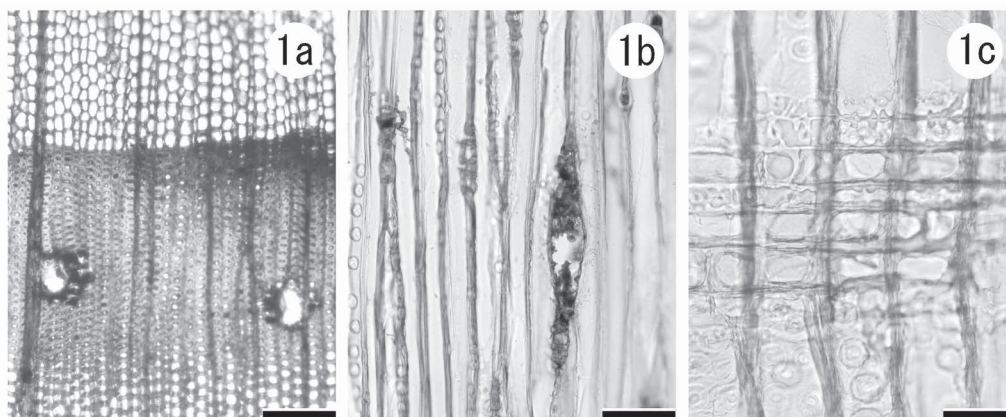


図10 木材の光学顕微鏡写真

1a-1c. マツ属複維管束亜属

a: 横断面 (スケール = 250  $\mu$  m), b: 接線断面 (スケール = 100  $\mu$  m), c: 放射断面 (スケール = 25  $\mu$  m)

表1 赤根川河口出土木材の<sup>14</sup>C年代測定結果

※ IntCal09 [Reimer et al., 2009] による

試料名	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	<sup>14</sup> C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	校正年代 ( $2\sigma$ ) <sup>*</sup> (cal AD)	機関番号
AK-01	10～12年輪目	-25.1	1170 $\pm$ 30	770-970 (95.4%)	Beta-355381
AK-02	47～51年輪目	-24.6	1230 $\pm$ 30	680-890 (95.4%)	Beta-355382
AK-03	101～105年輪目	-25.0	1140 $\pm$ 30	780-790 (2.2%) 800-990 (93.2%)	Beta-355383
参考資料	赤根川出土木材	—	1380 $\pm$ 110	420-890 (95.4%)	Gak-14072

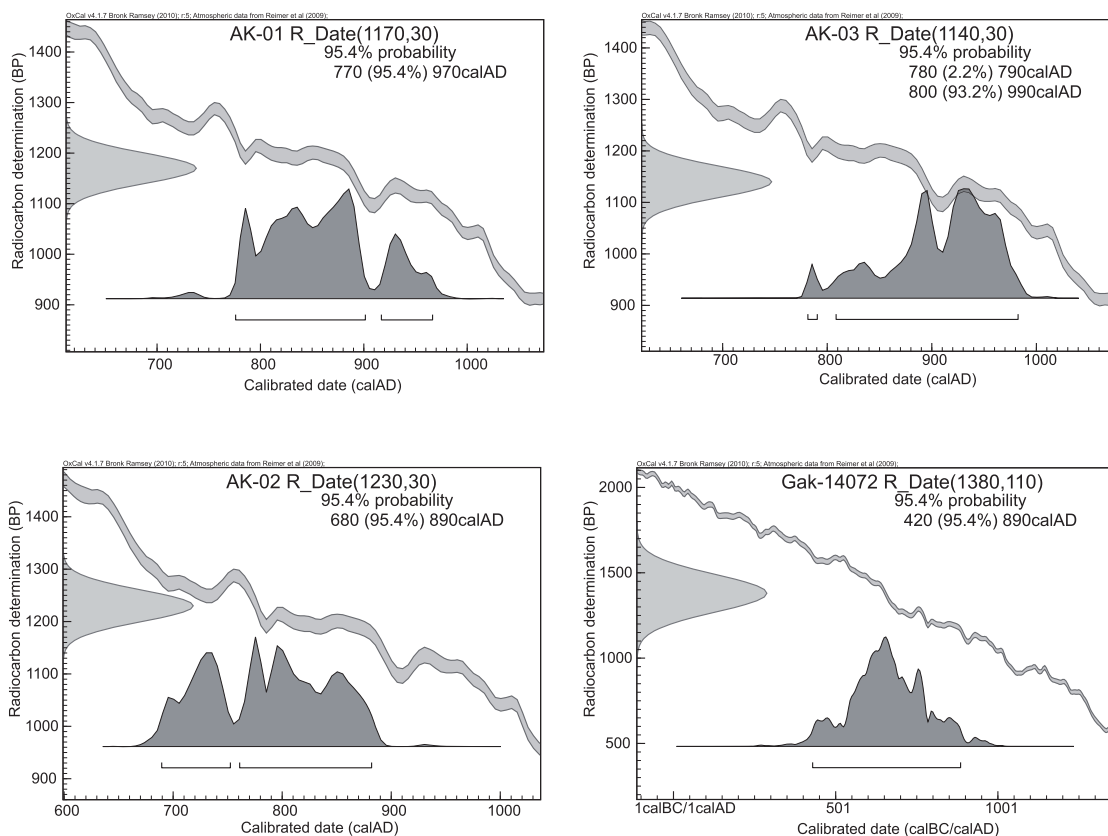


図11 <sup>14</sup>C年代測定結果

IntCal09によって校正した。OxCal4.2を用いて校正年代の確率分布を示した。グラフの下のバーは $2\sigma$ の範囲を示す。学習院大学による年代(Gak-14072)は参考資料。

範囲で880～940 cal ADの範囲まで絞り込めた。これは、おおよそ9世紀末から10世紀初頭にあたることを示している。中央値では900 ADとなる(図13)。

図14が示すように、今回の3点の測定結果と、IntCal09の校正曲線のカーブとはややずれがある。特にAK-02が古く飛び出ている。この箇所は、白頭山の埋没林の年輪と<sup>14</sup>C濃度のデータか

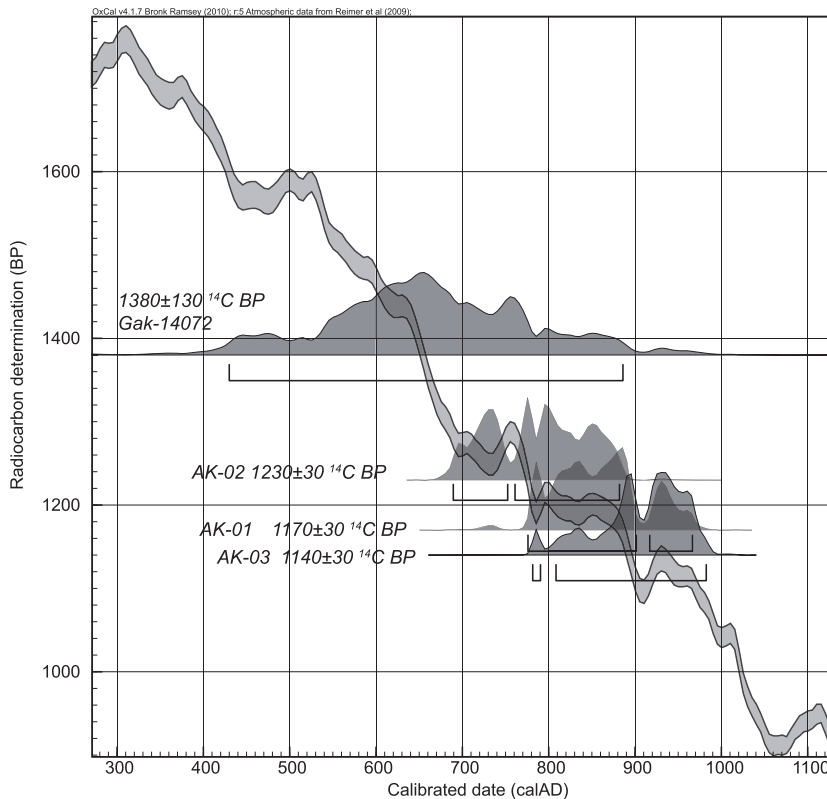


図 12  $^{14}\text{C}$  年代測定結果と IntCal09 との対比

較正年代と IntCal09 との関係を示したもの。グラフの下のバーは  $2\sigma$  の範囲を示す。  
学習院大学の結果は参考資料。

ら、IntCal09 と日本列島周辺の  $^{14}\text{C}$  濃度に若干ずれがある可能性が指摘されており [Sakamoto et al., 2013], 800 ~ 860AD の付近でやや古くなる。AK-02 はこのような日本列島周辺の  $^{14}\text{C}$  の濃度と北半球の平均的な  $^{14}\text{C}$  の濃度との違いを反映している可能性も考えられる。

いずれにしろ、3 点の試料の年輪による時間的關係から考えると、AK-03 の年代が 940 cal AD まで新しくなるとは考えにくい。AK-03 は、紀元後 900 年前後の年輪の可能性が高いと推測される。ただし、先に述べたように、AK-03 の外側の年輪がどの程度失われているのかが不明であり、伐採年は紀元後 900 年よりも確実に新しい。他の出土木材には腐敗していない外皮が付いている巨木もあったとの記載がある [黒田1989]。今回試料とした木材は丸木であり表面が加工されていたとは考えにくく、設置、埋没、取り上げの過程で表面の一部が失われたとしても、20 ~ 30 年程度だろうか。この問題を今回の分析試料のみから解明することは不可能であるが、今回の測定試料については 10 世紀中に伐採された木材と考えてよいのではないだろうか。

なお、1979 年発見時の木材について、かつて学習院大学で  $^{14}\text{C}$  年代の測定がおこなわれ、 $1380 \pm 110$   $^{14}\text{C}$  BP というやや古い値を示す年代が出ている。今回の測定結果よりも中央値だけみるとかなり古い (図 11, 図 12)。この結果に基づいて、これらの木材が 6 ~ 7 世紀ごろの可能性も指摘されていた [山下1989]。誤差が大きいため厳密な較正年代を推測することは難しいが、今回、この試料についても新たに Intcal09 の較正曲線で暦年較正をした。その結果、 $2\sigma$  の範囲で 420 ~ 890 cal

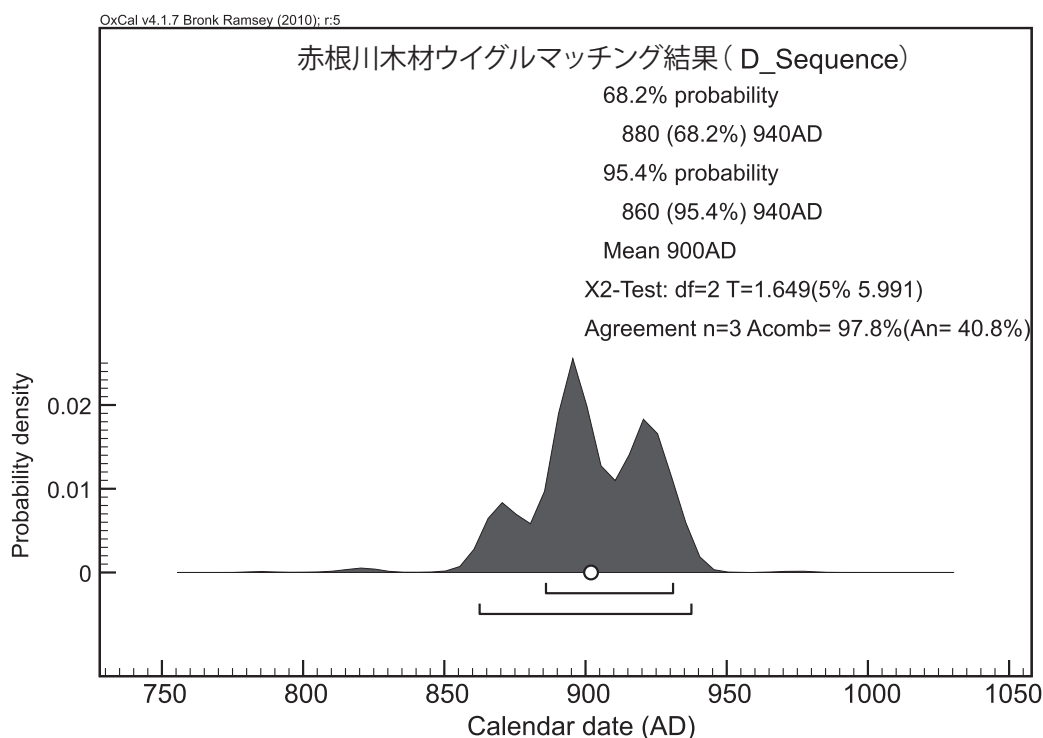


図13 AK-01・AK-02・AK-03のウィグルマッチング結果

ADとなり、年代幅が大きく、その年代的な位置づけを評価するのは困難であることが示された。図12に示したように、7世紀の確率が最も高いが、8世紀、あるいは6世紀の可能性も排除できない。最近のAMSによる<sup>14</sup>C年代測定の精度との比較から見ると、比較に耐えうる<sup>14</sup>C年代とは言えないだろう。

学習院大学で測定した試料は、1979年の赤根川河口の浚渫工事の際に引き揚げられた木材であり、今回測定した試料は1986年の今回測定した木材と、取り上げた時期と場所が若干異なっている。赤根川河口から引き揚げられた木材には異なる時期のものがあったのかどうか、今後さらなる分析が必要である。

#### ④……………魚住泊の位置と修築

天平年間に、行基は一日の行程を測って東から河尻、大輪田、魚住、韓、檉生の5つの泊を設けた、という。その距離は檉生と韓泊間が22km、韓泊と魚住泊間が21km、魚住泊と大輪田泊間が30km、大輪田泊と河尻泊間が22kmとなっており、ほぼ5里、20km間隔である(図1)。ところが、魚住泊と大輪田泊の間だけは7里半あり、他より2里半、約10km長い。これは、その間に潮の流れが速い幅約4kmの明石海峡が存在することに対する措置である。明石海峡は1日2回、潮流の向きが変化する。そこで、東行する船は東に流れる時を選び、西行する船は西に流れる時を選ぶため、手漕ぎの舟の時代には魚住泊と大輪田泊は潮待ちのために重要な港であった[黒田1989]。

魚住泊の歴史をみると、832年(天長9年)に清原真人が魚住泊の修築を建言し、さらに、867年(貞観9年)には東大寺僧賢和が改修を願い出ている。そして、914年(延喜14年)に、行式部大輔

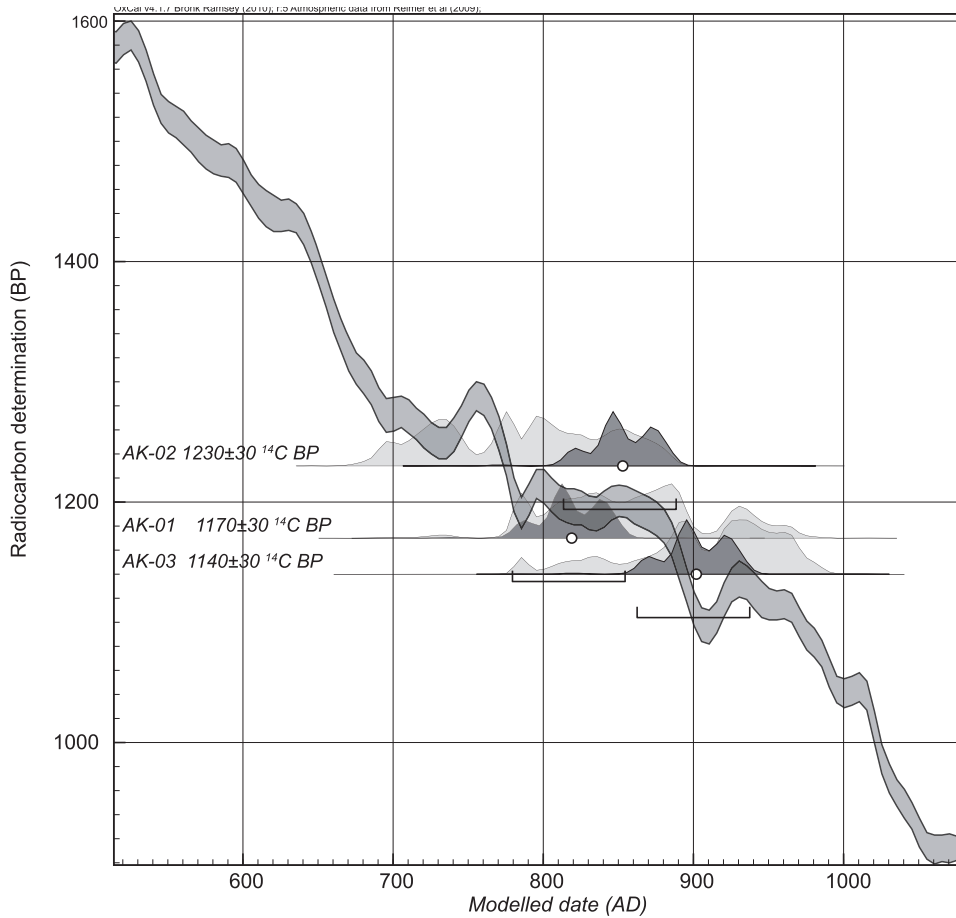


図 14 AK-01・AK-02・AK-03 のウイグルマッチング結果と IntCal09 との関係  
 グレーの確率分布はウイグルマッチング前のもの。  
 濃いグレーはウイグルマッチングによって統計処理をした後のもの。白丸はその中央値。

の三善清行が朝廷に提出した「重請修復播磨国魚住泊事意見十二箇条」（『本朝文粹』巻第二所収[黒田編1985:32~33]）の中で、天平年間（729～748年）に僧行基が播磨・摂津に五泊を定めて魚住泊を設置して以来 200 年間弱の毀壊と修復の歴史について簡にして要を得た記述もおこなっている。その中で、「…此の泊天平年中建立する所なり。其後延暦の末に至る五十余年、人其の便を得る。弘仁の代、風浪侵襲し、石頹れ沙漂う」とあり、海岸の浸食により泊が荒廃していた様子をよみとれる。すなわち、「山陽・西海・南海三道、舟船海行の程を見るに、櫻生泊より韓泊に至ること一日行。韓泊より魚住泊に至ること一日行。魚住泊より大輪田泊に至ること一日行。大輪田泊より河尻に至ること一日行。これ皆行基菩薩、程を計り建て置けるところなり」とあり、その後、延暦末（805年頃）まで便利であったこと、弘仁（810～823年）の代に風波により侵襲し石がとれ砂が漂うようになり、天長（824～833年）年中に右大臣清原真人が朝廷に議を奏し修復、承和末（845年頃）に再び毀壊し、貞観初め（860年頃）に東大寺の僧賢和が単独で力を尽くし修復事業をおこない人民がその利を蒙ったこと、さらに延喜（910年頃）の今、また修復が必要になっていることを三善清行は述べて、その援助を請願している。

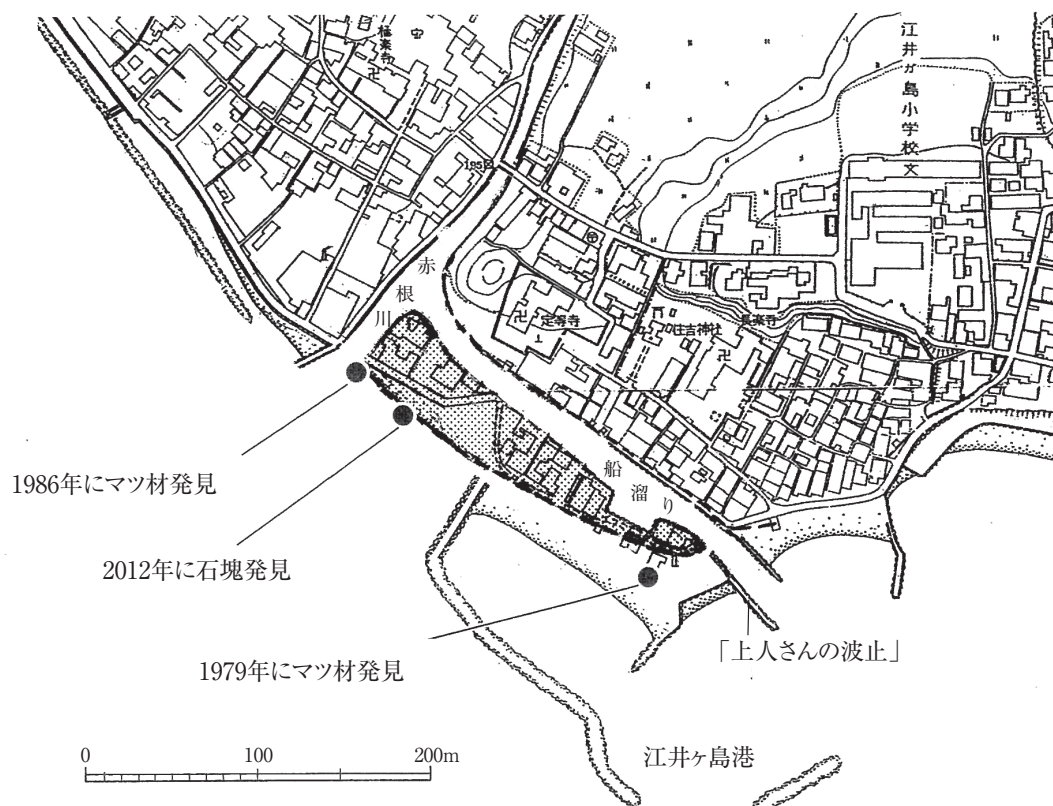


図15 江井ヶ島港の現状とマツ材発見地点、および江戸時代の魚住泊の築堤推定地  
(1957年の地図に書き込む)

その後は管理されず放置されたため、航行する船の多数が沈み、人命が損失することも少なくなかったであろう。そこで、1196年(建久7年)に僧重源は大輪田泊とともにこの魚住泊の石椽工事の奏上を太政官に提出し、その願いは聞き届けられた。当時、重源は東大寺の再建にあたり、大勧進となっており、西国からの建築資材を運ぶには、明石海峡を安全に通過させる必要があった。そのために海峡をはさんだ両港の整備を図ったのであろう。

重源の修築以降、建保年間(1213～1219年)に重聖上人が修築を行い、1289年(正応2年)には性海上人の奏上によって修築を行った記録が残っている。しかし、1289年(正応2年)の修築以後、改修の記録は1888年(明治21年)まで途絶えている。

江戸時代の地誌『播州名所巡覧図絵』には、江井ヶ島は「旧は嶋にて、釋の行基の築く所なり。故に嶋といふ。地中、今も石木など残れり。」とある。江戸時代に、すでに港の基礎となる石や材の存在が認識されていたことと、この港の築造が行基にさかのぼることが伝承されていたことがわかる。

田中源左衛門家文書には、文化2年(1805年)に描いた絵図がある(写真4)。この絵図では、赤根川の川筋は蛇行しつつ河口へ至り、河口付近で大きく東へその流路を変えている。この河道の南は東西方向に延びる突堤状の島になっていることから、江井ヶ島は人工的に設けた船入りのための港であったと推測できる。その一方、赤根川河口の本来の位置には、その痕跡の表現がある。また、この絵図には、島の突端部に石積み状の堤防を描き、「波門(はと)」の表記がある。地元ではこれ

を「しょうにんさんのほと」とよんでおり、潮が引くと築堤に使ったという石が多数見つかり、その中でも大きな石を「馬石」とよんでいたという[千田2001]。

以上の文献記録と、今回の<sup>14</sup>C年代の測定の結果とを対応させて考えると、1986年に引き揚げられた木材は10世紀の年代を得たことから、平安時代の魚住泊に関する木材であった可能性がいろいろつよくなった。赤根川河口および江井ヶ島港付近でみつかったこれらの遺構とその年代が明らかになったことにより、魚住泊の位置は現在の江井ヶ島港の位置で確定したといっていよう。また、前述のように、914年(延喜14年)に三善清行が魚住泊の修復を朝廷に願っていることから、これらの記事との関連を想定するならば、赤根川河口から出土した木材は、この際の修復時のものと考えたほうがよいのであろう。

## おわりに

本研究では、1986年に兵庫県明石市赤根川河口から発見された丸太材(明石市立文化博物館蔵)の<sup>14</sup>C年代測定をおこなった。その結果、この木材は平安時代、9世紀末から10世紀初めの年代を示した。魚住泊に関する文献記録を検討し、それらと対応させたところ、914年(延喜14年)に三善清行が魚住泊の修復を朝廷に願っていること、出土した木材はこの時の修復時のものの可能性が高いことが明らかとなった。また、1979年発見時の木材はかつて学習院大学で<sup>14</sup>C年代の測定がおこなわれ、 $1380 \pm 110$  <sup>14</sup>C BP というやや古い値を示す年代が出ており、今回、IntCal09で暦年較正を行ったが、測定時の誤差が大きく較正年代を絞り込むことはできなかった。これをもって、行基以前にすでに魚住泊の基礎ができあがっていたのかどうかを判断することはできないが、再検討していく必要があるだろう。今後、可能であれば赤根川河口から出土した他の木材、あるいは新たな資料が得られ次第、<sup>14</sup>C年代測定を進めていき、魚住泊跡の意義について、年代学的な視点から検討をおこなっていきたい。

江戸時代の魚住泊は、付近の海岸線がく字形に屈折する位置に河口をもつ赤根川河口から自然流路に水を流す一方、それと直角方向に東南に細長い島を築いて、その間に船を泊めて、嵐や海が荒れた時に大風と波浪から護る船溜めにしていたと推定することができる。この場所を魚住泊にしたのは、以前から高丘や金ヶ崎で焼いた須恵器や瓦を赤根川の流れを利用して運び、河口から各地に搬出していた津としての前史があったからであろう。

それにしても巨大な人工島である(図15)。この地域の海岸の浸食の激しさと速さを考えると、魚住泊を維持・管理していくことは大変なことで、古代から、莫大な費用と労力を費やして修築が繰り返されたことは容易に理解できる。江戸時代の絵図にある江井ヶ島はその最終的な姿なのであろう。

## 謝辞

本論の年代測定研究は、受託研究「魚住泊跡出土木材の調査研究」として、工藤が明石市から研究費を受けて実施した。赤根川河口出土材の樹種同定では(株)パレオ・ラボの黒沼保子氏にお世話になった。記してお礼申し上げる。

---

註

---

(1)——魚住と江井島の地名の変遷は複雑である。以下は地元に住む橘幸男氏の教示による。

現在の明石市大久保町江井島地区の大字は、江井ヶ島と西島とに分かれている。江井島は、東島、西江井、東江井の3地区から成り、西島は、西島の単独である。かつての赤根川は、現在のように真っ直ぐに海に流れ込んでおらず、河口近くで東に向かって流れ、現在の江井ヶ島漁港のところで海に流れ込んでいたので、現在の地名も、赤根川の東側の海岸寄りの一部分は「西島」に所属している。

「魚住村」については、『角川日本地名大辞典・兵庫県』（1988年）によると、以下のとおりである。「魚住村」は、1875年（明治8）から1889年（明治22）までの地

名で、明石郡の西島村と森村が合併して成立した。1889年にこの「魚住村」の西隣に、別の魚住村が成立し、現在の西島は大久保村の大字となった。現在の西島地区は、1889年から1929年（大正9）までは、明石郡大久保村字魚住村と称した。1929年からは明石郡大久保村西島となり、1938年（昭和13）からは明石郡大久保町西島となった。そして、1951年（昭和26）から明石市大久保町西島となった。その一方、1889年から1951年まで（明石市に合併するまで）の「魚住村」は、明石郡の金ヶ崎、長坂寺、清水、中尾、西岡の5村が合併して成立した。したがって、明石郡大久保村大字魚住村（つまり西島地区）と、明石郡魚住村（つまり、5村合併地区）とが併存した時期がある。

---

引用文献

---

- 黒田義隆 1960『明石市史』上巻，明石市役所。  
黒田義隆編 1985『明石市史資料』第5集，古代・中世篇，明石市教育委員会。  
黒田義隆 1989「古代の地名—魚次浜と錦浦—」「魚住船瀬—撰播の五泊—」「中尾のすがた—むかし いま—」68～73頁，78～84頁，明石市中尾土地区画整理組合。  
千田 稔 2001『埋もれた港』小学館。  
山下俊郎 1989「奈良時代」『中尾のすがた—むかし いま—』60～67頁，明石市中尾土地区画整理組合。  
山下俊郎 2005「発掘資料から見た魚住の泊」『戦乱に揺れた明石』講座明石の中世史，99～123頁，明石市生涯学習センター。  
吉田邦夫 2004「火炎土器に付着した炭化物の放射性炭素年代」新潟県立博物館編『火炎土器の研究』17～36頁，同成社。  
Reimer, P. J., Baillie, M. G. L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Burr, G. S., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., McCormac, F. G., Manning, S. W., Reimer, R. W., Richards, D. A., Southon, J. R., Talamo, S., Turney, C. S. M., van der Plicht, J., & Weyhenmeyer, C. E. 2009. IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 51, pp. 1111-1150.  
Ramsey, B. C. 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51-1, 337-360.  
Sakamoto, M., Mitsutani, T., and Imamura, M. 2013 <sup>14</sup>C wiggle-matching of buried wood of Baekdu Mountain by B-Tm eruption - possible offsets compared to IntCal. 7th International Symposium, <sup>14</sup>C & Archaeology, Book of Abstract. 146 p.

春成秀爾（国立歴史民俗博物館名誉教授）  
工藤雄一郎（国立歴史民俗博物館研究部）  
稲原昭嘉（明石市文化・スポーツ部文化振興課）  
（2014年1月17日受付，2014年9月29日審査終了）



---

**Place and Dates of *Uozumi-no-Tomari*  
: Reconsideration of the Buried Woods Excavated from the Eigashima Port,  
Akashi City**

HARUNARI Hideji, KUDO Yuichiro and INAHARA Akitaka

*Uozumi-no-Tomari* is one of the five ports opened in Harima and Settsu Provinces in the Tenpyō period (729–749) by a monk named Gyōki. It was believed to have been located in the present port of Uozumi or Eigashima though there was not ample evidence. In this study, radiocarbon dating was performed on the samples taken from the timbers excavated in 1986 at the mouth of the Akane River next to Eigashima Port. The calibrated radiocarbon dates indicated that they had been felled in the 10th century, which coincides with Engi 14 (914), when Miyoshi Kiyoyuki applied to the Imperial Court for the restoration of *Uozumi-no-Tomari* Port. It is considered that the origin of the port was a quay with wooden foundations and stone and soil banks at the mouth of the Akane River and that it has become the present port of Eigashima.

Key words: *Uozumi-no-Tomari*, Eigashima, timbers excavated at the mouth of the Akane River, radiocarbon dating, wiggle matching



写真 1 赤根川河口発見の木材  
(1986 年)



写真 2 赤根川河口発見の保存されている加工材



写真3 江井ヶ島の現状とマツ材発見地点  
(左：1986年発見地点，右：1979年発見地点)



写真4 江戸時代の江井島付近の絵図